

一九九九年国文学会彙報

一九九九年国文学会活動状況

△「新人生歓迎会」 四月五日 田辺校地紫苑館 学生部会主催

△国文学会総会、研究発表会 六月一三日 寧靜館会議室

・総会

・研究発表会

三島由紀夫の「熊野」―三島歌舞伎と「近代能楽集」と―

木谷真紀子（本学大学院博士課程後期課程）

工業高校における国語教育

大塚実（京都市立伏見工業高校教諭）

「夕鶴」と「昆虫夕鶴」 吳艶（本学大学院博士課程後期課程）

揚平友（中国北方昆曲劇院・本学客員研究員）

△公開講演会・研究発表会 一月七日 寧靜館会議室

・公開講演

韓国「パンソリ」と日本の語りもの

千二斗（本学客員教授・文学博士）

・研究発表

田中英光『野狐』論―「野狐」の意味

玄政勲（本学大学院博士課程前期課程）

東西の女流劇作家による能の再生―湯浅裕子の「ほんにゃミ

リアム」―

アンパロ・アデリナ・ウマリ

（本学大学院博士課程後期課程）

笛吹く薫―「この君」への相伝として―

桑原一歌（本学大学院博士課程後期課程）

△学生部会講演会

・“WE LOVE COMMUNICATIONS” 二月一〇日

田辺校地知真館二―一〇二二 ヒロ寺平（DJ）

・「京都よ、わが情念のはるかな飛翔を支えよ」

二月一三日 尋真館四〇 松原好之（作家）

△同志社国文学

第五十一号 二〇〇〇年一月一〇日発行

第五十二号 二〇〇〇年三月二〇日発行

△国文学会会報 第二七号 二〇〇〇年三月二〇日

一九九九年修士論文題目

平家公達草紙の性格と位置づけに関する考察 小林 加代子

『春雨物語』の樊噲と『洪吉童伝』の洪吉童 金 美蓮

——『水滸伝』の英雄譚の日韓二様の受容——

三好達治の四行詩

——俳句の影響を通して—— 元木 直子

泉鏡花の文学作品における漢詩・詞の受容

銭 形

森鷗外「灰燼」試論

——「新聞」への拘泥に着目して—— 小出 久美子

『通俗伊蘇普物語』の漢字表記

——漢語の受容と振り仮名の役割—— 塩江 敦子

一九九九年卒業論文題目

東歌における序詞と地名

加藤 敬暁

『萬葉集』巻一・大津皇子関係歌

——仮託という方法をめぐって—— 河合 美貴

「讃岐の狭岑の島にして、石の中の死人を見て、柿本人麻呂の作る歌」の考察

——挽歌と異常死の関連から—— 北村 いづみ

万葉集巻十、七夕歌群について

長野 耕治

『万葉集』の私家集について

——『笠朝臣金村歌集』を例に—— 田野 順也

『今昔物語集』「以陰陽術殺人語」考

稲森 麻里子

『宇治拾遺物語』第四八話「雀報恩の事」考

犬飼 佳奈子

『今昔物語集』「夷母弃山」考

『宇治拾遺物語』巻三ノ十八の意図について

——同話・類話と比較して——

類聚本系『江談抄』第三巻第五十条考

——「葉二」伝説について——

今昔物語集巻二十八「醉茸死語」考

『平家物語』における龍神信仰と安徳天皇

——覚一本を中心に——

『平家物語』「剣」の章段の意味するもの

——宝剣の改鑄と真偽をめぐって——

覚一本『平家物語』の重衡像

——巻九以降を中心として——

婚姻譚としての『住吉物語』

『松浦宮物語』研究

——戦闘場面に関する一考察——

狂言「蚊相撲」の形成と展開

「義経の手の郎等」群像

——『義経記』的従者像に関する一考察——

謡曲「鉄輪」の形成過程

——宇治橋姫伝説との関わりを中心に——

和泉式部と雨

説経「まつら長者」の構造

鈴木 文

田口 千草

山下 洋平

吉野 仁士

榎本 祥子

早川 孝

杉本 有美

東良 美和

加藤 直志

小谷 祐介

松本 隆司

宮内 基久子

錦織 崇

太田 百合子

能楽「井筒」の構造について

丸山 圭子

寺山修司の作品をめくって

岡崎 真央

——映画『田園に死す』など——

谷崎探偵考

菊田 靖子

寺山修司と短歌連作

前田 郁子

「深い河」にみる宗教のありかた

川畑 ころこ

『閑吟集』「花」用語考

桜井 麻那

——その使用と配列の傾向——

宮沢賢治『ひかりの素足』の構成

近藤 美帆

浅井了意の天狗

川島 さやか

芳沢あやめの女芸

素輪 真由美

歌舞伎における紙子について

上田 智子

——『歌舞伎評判記集成』第一期より——

「虫のいろいろ」と尾崎一雄の「虫」のいろいろ

久野田 健

余分なこと、どうでもいいことに対する強い意志

松本 知子

——江國香織論——

横井 綾子

アマリタ 人間の記憶についての考察

春木 眞巳

吉行淳之介『夕暮まで』論

李 承俠

坂口安吾作品に於ける肉体と精神

三田 誠

坂口安吾の文学

——『桜の森の満開の下』における「女」——

「それは何であるか」「僕」とは

青木 亮人

——『夢野久作「木魂」論

三上 雅弘

——久作における心霊学——

傍嶋 剛

漱石の自我とその理想郷の世界について

傍嶋 剛

「音」が語る作品世界 村上春樹『1973年のピンボール』論

森 妙

遠藤周作が書いた『聖書』

東 森 賀 寛

——日本におけるキリスト教受容をめくって——

——その「語り」をめくって——

松谷みよ子『龍の子太郎』における龍について小森 愛子

宮本輝『優駿』「美しい競馬小説」の理由 近藤 美帆

宮沢賢治『ひかりの素足』の構成 小柴 晶子

——法華経信仰とのかかわり——

「虫のいろいろ」と尾崎一雄の「虫」のいろいろ 久野田 健

持てる者、持たざる者の『それから』 森 田 啓 嗣

日本の葬送習俗に見る「葬儀の日」 西 村 歌 織

鷲沢朋の主人公を通して今の在日の若者の意識を探る 梅 川 雅 代

——在日韓国・朝鮮問題を追って—— 宮 本 雅 也

中文翻訳『それから』の研究 青 木 亮 人

——感性訳出の可能性とその限界——

——村上春樹『ノルウェイの森』まで——

「それは何であるか」「僕」とは 青 木 亮 人

『ノルウェイの森』の癒しと大衆に受け入れられた理由 垣 内 温 子

「音」が語る作品世界 村上春樹『1973年のピンボール』論 森 妙

『外科室』——「下」の構造分析と技巧—— 奥山 妙子

星新一の作品は、何故教育現場で用いられているのか 榎阪 美保

太宰治の小説において翻案という方法はいかなる意味を持つか 一色 知希

料理小説としての村上龍『はじめての夜 二度目の夜 最後の夜』 亀野 高弘

姫野力オルコ『ラブレター』について 喜多 由佳

『オリンボスの果実』と日本のスポーツ文学 森 あずさ

星新一・ショートショート作品群における分類とその傾向の分析 中瀬 美栄

太宰治・連作小説論 西村 亜衣子

——「愛と美について」から「ろまん燈籠」へ—— 高保 麻衣子

『キッチン』と『満月—キッチン2』の構造及び時間について 田中 陽子

『ホリーガーデン』 田中 陽子

——結末に生まれるもうひとつの物語—— 内海 直子

『季節のない街』と『プロット』の関係 輪湖 みどり

『恋愛映画』に見る会話及び映像効果 山口 裕子

江戸川乱歩 その弦想と自意識 山口 裕子

——「論理的乱歩」と「幻想的乱歩」をめぐって—— 東 健太郎

日本語とスペイン語のヴォイスの対照 東 健太郎

唱歌・童謡における色彩語使用 東本 佐保子

二人称代名詞「あなた」の現代における語義・用法 伊藤 玉青

外来語の形容動詞 亀田 美紀

——四〇年間の新聞記事に見る外来語の形容動詞の変遷—— 松村 美緒

日本語教育における基本語彙 松村 美緒

『細雪』の敬語 松尾 茜

——接頭辞「お」を中心に—— 村松 浩二

商品ネーミングの諸相 中島 由子

動物の鳴き声をあらわす擬音語 大盛 麻子

身体語彙を用いた慣用句の考察 坂本 拓彦

地名の研究 坂本 拓彦

——地名と居住者との関係を中心に—— 鈴木 美和子

アスペクト表現の日英対照 高橋 貴紀

——二つのテクストを通して見る—— 打田 有希

岐阜県中心部における現代方言の研究 上村 香奈

複数接尾辞「たち」「ら」について 浅利 優子

落語の語用論 上村 香奈

——おかしさの分析—— 浅利 優子

国語辞書における類義語の意味記述について 浅利 優子

——あらしう・きそう・たたかうを例に—— 浅利 優子

マンガにおける擬音語・擬態語

——手塚治虫の作品から——

『ノルウェイの森』論

——比喻表現を中心に——

漢語系接辞「一然」について

否定の接頭語「不」「無」について

現代の変形文字について

——中学生の意識調査をもとに——

鎌倉 由喜利

木村 史子

前田 一乃

松村 茜

中尾 歩

同志社大学国文学会会則

第一章 総則

第一条 本会は同志社大学国文学会と称する。

第二条 本会は国文学・国語および国語教育の研究を目的とする。

第三条 本会の会員は同志社大学国文学専攻に属する左記のものとする。

1 専任教員

2 学部在学生

3 大学院在学生（博士課程前期・後期）

4 学部卒業生

5 大学院修了生

ただし、特に入会を希望し、評議員会の認められたものは会員になることができる。

第四条 第三条 4・5 項目の会員で、卒業または修了後四年以上を経過した者、および第三条ただし書きによる会員は、退会することができ、また、これらの会員のうち、会費の滞納が二年分以上に及んだ者は、退会の意思を表明したものとみなす。

退会者が復会を希望する場合は、未納会費を納入するものとする。

第五条 本会の事務所を同志社大学文学部国文学研究室におく。

第二章 事業

第六条 本会の第二条の目的を達成するために左記の事業を行なう。

1 研究会の開催

2 講演会の開催

3 機関誌の発行

4 研究上必要な調査見学

5 その他、目的達成に必要な事項

第三章 組織および役員

第七条 会長は会を代表する。会長は専任教員の互選による。

第八条 評議会は総会に準ずる決議機関である。

第九条 評議員の選出は左記による。

1 専任教員 全員

2 学部在学生 一部 十二名

二部 四名

3 大学院在学生 一名

4 学部卒業生 二名

5 大学院修了生 一名

ただし、4・5 項については会長がこれを委嘱する。

第十条 常任委員会は会務の企画、立案、執行に当る。

第十一条 常任委員の選出は左記による。

1 専任教員 四名

2 学部在学生 一部四名 二部一名

3 大学院在学生 一名

4 学部卒業生 一名

5 大学院修了生 一名

ただし、4・5項については会長がこれを委嘱する。

第十二条 会計監査は二名とし、評議員会がこれを委嘱する。

第十三条 役員の任期は一年とする。ただし再選をさまたげない。

第十四条 第三条の各項の会員はそれぞれの部会を設けることができる。

第四章 総 会

第十五条 総会は本会の最高の決議機関である。

第十六条 総会の開催は左記による。

1 定期総会は年一回これを開かねばならない。

2 臨時総会は評議員会または常任委員会が必要と認められた時、これを開くことができる。

3 会員の五十名の要請があれば臨時総会を開かねばならない。

第十七条 総会は出席会員によって成立する。

第十八条 総会の議決は出席者の過半数をもって成立する。可否同数の場合は議長がこれを決する。

第五章 会 計

第十九条 本会の会費は年額二〇〇〇円とする。(昭和五十二年改訂)

第二十条 本会の会計年度は四月一日より翌三月三十一日までとする。

第六章 補 則

第二十一条 本会則の改正は総会において出席会員の三分の二以上の同意を必要とする。

第二十二条 本会則の発効は昭和五十年四月一日とする。

投 稿 規 定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場であり、進んでご投稿ください。枚数は四百字詰三十枚以内。第五十三号の締切は二〇〇〇年九月末日、厳守。ただし、掲載論文には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任してください。採否の問合せには応じられません。

執筆者紹介

千 二斗ちしん いどう（一九九九年度本学客員教授、韓国圓光

大学校名譽教授）

山内ゆかやまうち（本学大学院博士課程前期課程九八年度修了）

藤原麻弥子ふじわらまやこ（本学大学院博士課程前期課程九八年度修了）

吳 艶いづえん（本学大学院博士課程後期課程）

森澤夕子もりざわゆうこ（本学九五年度卒業生）

河 京植かきょうし（本学大学院博士課程後期課程）

編集後記

文部省小学校令施行規則が改められ、かな字体の統一、棒引き字音かなづかいが実施され、坪内雄蔵編の『尋常國語讀本』、高等國語讀本』が刊行されたのが一九〇〇年であった。この年、井上円了『漢字不可廢論』の発表、『言語學雜誌』の創刊があり、松下大三郎・渡辺文雄『國歌大觀』の刊行もあった。『高野聖』、『思ひ出の記』、『はつ姿』などが発表され、『明星』が創刊されている。

二〇〇〇年に入って、この百年の日本の歩みをさまざまな角度から振り返り、新しい世紀を切り拓くよすがとすべきであろう。一月に出された「英語を第二公用語に」という提言についても、諸方面から意見が出されているが、これほど重大で真剣な議論と検討を要する問題はないであろう。

本号には、文学関係五篇と言語関係一篇、合計六篇の論文を載せることができた。寄稿者のうち半数の三氏は外国籍の人であり、期せずして時代を感じさせる号となった。

本号について、多方面からご意見が寄せられることを期待したい。

（玉村文郎）

同志社国文学 第五十二号

二〇〇〇年三月二十五日 印刷

二〇〇〇年三月二〇日 発行

編集 玉村文郎
田中励儀

発行 同志社大学国文学会

(代表) 向井芳樹

京都市上京区今出川通烏丸東入
振替 〇一〇九〇一―二七三七

印刷所 共同印刷工業株式会社
京都市右京区西院久田町